

幼児の化粧に関する保護者、保育者の認識

筑波大学 水野 智美

筑波大学 徳田 克己

I. 目的

おしゃれの低年齢化がエスカレートしている。かつて化粧は、高校を卒業した後に始める人が多かったが、最近では小学生や中学生が化粧をしている姿を多く目にするようになってきた。その流れが幼児にも及び、幼児の化粧も珍しいことではなくなった。

最近の幼児雑誌には、化粧に関する内容が取り扱われているだけでなく、実際に子どもが自分の肌や爪、髪に塗って遊ぶことができるキッズコスメの付録がついてくるようになった。また、幼児雑誌に登場する女兒の7割以上が口紅、チーク、アイシャドーなどの化粧をしていることが確認されている(徳田・水野, 2018)。さらに、玩具として、さまざまなキッズコスメ商品が販売されている。幼児雑誌に登場する化粧をした子どもは、大人に流行している化粧方法(アイシャドーやマスカラを使ったアイメイク)をしており、キッズコスメ商品にも大人と同様の内容のものが販売されている。

キッズコスメ商品は、1950年代から製造されていたが、当時としては高額な商品であったことからそれほど市場に出回ることはなかった。また、その後、いくつかの化粧品メーカーや玩具メーカーがキッズコスメ商品を販売したが、1971年に厚生省(当時)が子どもに好ましくないという理由から、化粧品工業会に製造中止を呼びかけ、その後しばらくは下火になっていた。しかし、1990年代後半に女子高生による化粧ブームが到来し、徐々に低年齢の子どもにも化粧ブームが訪れることになった。

このように低年齢の子どもに化粧が身近に

なったことによって、トラブルも発生している。皮膚科の医師である岡村(2013, 2017)は、低年齢の子どもが化粧をすることによって、かぶれや炎症を起こしていることを報告している。最近では、ビューラーを使用したことによる金属アレルギーを起こす子ども、つけまつげやまつげパーマの接着剤や化学薬品による目の周りの炎症を起こす子どもが増加していると言う。

そこで本研究では、幼児を持つ保護者、幼稚園や保育所等に勤務する保育者を対象に、最近の子どもはどの程度、化粧をしているのかについての状況を明らかにするとともに、子どもが化粧することに保護者や保育者はどのような認識をもっているのかを明確化したいと考えた。

II. 研究1: 幼児の化粧に関する保護者の認識

1. 目的

幼児を持つ母親を対象に、幼児期の子どもが化粧をすることについての認識、自分の子どもが化粧をした経験を明らかにする。

2. 方法

(1) 調査対象者

埼玉県、茨城県、沖縄県で開催された幼児を持つ保護者を対象とした講演会(それぞれの県で1か所ずつ)に参加した母親480名を調査対象とし、282名から回答を得た(回収率59%)。そのうち、回答に不備のあるものを除き、228名の回答を分析対象とした。

(2) 調査手続き

任意による無記名自記式質問紙調査を行った。調査時期は、2016 年 1 月～3 月であった。

(3) 倫理的配慮

筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 1026）。

3. 結果

(1) 調査対象者の属性

調査対象者の属性を表 1 に示した。調査対象者の年齢は 30 代と 40 代が 9 割以上を占めており、20 代はわずかであった。また、子どもは 2 人以下が 7 割以上を占めた。また、女児のいる人は 63%であり、小学生以下の女児がいる人は 61%であった。

(2) わが子の化粧経験

小学生以下の女児を持つ人 ($n=139$) を対象に、子どもが幼児期に化粧をした経験があるかどうかを尋ねたところ、「ある」と答えた人は 85% (118 名) と、大半を占めた。子どもが化粧をしたことがある人に、子どもがはじめて化粧をしたのはいつかを尋ねたところ (表 2)、3 歳と答えた者が 7 割以上であり、その他の年齢ではごくわずかであった。子どもがどのような時に化粧をするかを尋ねたところ (表 3)、「発表会や七五三などの特別な日」と答えた人が大半であったが、「家の中での遊び」と回答した者も約 2 割いた。お出かけや幼稚園、保育所にしていく子どもは少なかったことから、基本的には特別な日以外は、家の外にしていけない家庭がほとんどであると言える。

子どもが化粧をする頻度を尋ねたところ (表 4)、1 年に 2 日以下と答えた人が 6 割であり、1 か月に 1 回以上化粧する子どもは 1 割に過ぎなかった。子どもが化粧をしたことによって生じた問題を尋ねたところ、「化粧品によって皮膚に異常が発生した」と答えた人が 2% (2 名)、「化粧が禁止されている場所 (幼稚園や保育所など) に化粧をしていきたいと駄々をこねた」2% (2 名) が挙げられたにすぎなかった。ただし、岡村 (2017) によると、化粧をするこ

とによって、すぐにかぶれなどの症状が現れなくても、アレルギー反応を起こす原因に対して抗体が作られ、将来的にかぶれを起こす危険性のある状態になっているケースがあると言う。そのため、現在は化粧品によって皮膚に異常が発生していなくても、将来的に皮膚トラブルが生じる可能性があると考えられる。

(3) 幼児の化粧に関する保護者の認識

幼児期の子どもが化粧をすることについて、どの程度、抵抗があるかを、「非常に抵抗がある」から「全く抵抗がない」までの 5 段階のリッカート尺度で尋ねた (得点が高い方が、抵抗が強いことを示す)。母親の年代 (20 代、30 代、40 代) によって抵抗感に違いがみられるかど

表 1. 調査対象者の属性

$N=228$

年齢	20 代	3% (8 名)
	30 代	63% (144 名)
	40 代	32% (72 名)
	無回答	2% (4 名)
子どもの人数	1 人	24% (55 名)
	2 人	52% (119 名)
	3 人	14% (32 名)
	4 人以上	2% (3 名)
	無回答	8% (19 名)
女児の有無	女児あり	63% (143 名)
	女児なし	37% (85 名)
小学生以下の 女児の有無	女児あり	61% (139 名)
	女児なし	39% (89 名)

表 2. 子どもがはじめて化粧をした年齢

$n=118$

2 歳	7% (8 名)
3 歳	71% (84 名)
4 歳	2% (2 名)
5 歳	1% (1 名)
6 歳	2% (2 名)
無回答	18% (22 名)

表 3. 子どもはどのような時に化粧をするか
(選択式) $n=118$

発表会や七五三などの特別な日	87% (103 名)
家の中での遊び	19% (23 名)
デパートへの買い物や外食などのお出かけ	2% (2 名)
幼稚園や保育所にいくとき	2% (2 名)
その他	2% (2 名)

(複数回答)

表 4. 子どもの化粧の頻度 (選択式) $n=118$

ほぼ毎日	1% (1 名)
1 週間に 3、4 日程度	0
1 週間に 1、2 日程度	1% (1 名)
1 か月に 1、2 日程度	8% (9 名)
半年に 1、2 日程度	12% (14 名)
1 年に 2 日以下	60% (71 名)
無回答	18% (22 名)

表 5. 母親の年齢の違いによる化粧に対する抵抗感 $N=228$

	M	SD	F 値
20 代	3.40	.548	$F(2, 178)$ $=0.75$
30 代	3.75	.974	
40 代	3.60	.999	

うかについて、分散分析を用いて確認したところ (表 5)、有意な差は認められなかった。また、子どもが化粧をする頻度 (1 か月に 1 回以上化粧をするか、1 回未満か、化粧をしたことがないかの 3 群) によって、化粧への抵抗感に違いがみられるかについて、分散分析を用いて確認したところ (表 6)、有意な差が認められた。多重比較を行ったところ、「1 か月に 1 回未満」と「1 か月に 1 回以上」、「化粧をしたことがない」と「1 か月に 1 回以上」との間に、それぞれ有意な差が認められ、子どもが 1 か

月に 1 回以上の化粧をしている群は他の群と比べて抵抗感が低いこと、1 か月に 1 回未満の群は化粧をしたことがない群と抵抗感に違いがないことがわかった。

化粧に関する意見について、どの程度賛成をするかを「非常に賛成する」から「非常に反対する」までの 5 段階のリッカート尺度で尋ねた (得点が高い方が、賛成の程度が高いことを示す; 表 7)。その結果、「化粧をして幼稚園や保育所に行ってはいけない」と認識する傾向が強い一方で、「特別な日に化粧するのは問題ない」と考える傾向がみられることから、幼児の化粧は、発表会や七五三などの特別な日だけにするものであり、幼稚園や保育所などの日常生活ではすべきではないと考えていることが確認できた。また、「子どもは化粧をしなくてもかわいいので化粧をする必要はない」と認識する傾向が強くあるために、「子どもの身体に安全な化粧品ならば子どもに使わせてもよい」「子どもが喜ぶならば化粧をしてもよい」「化粧後に丁寧に落としてあげれば子どもに化粧することに問題はない」という意見には反対であった。

幼児の化粧に対する抵抗感に、調査対象者のどのような認識が影響しているのかを明らかにしたいと考え、幼児が化粧をすることへの抵抗感を目的変数とし、表 7 に示した 8 項目の認識を説明変数として、重回帰分析 (強制投入法) を行った (表 8)。その結果、「化粧品は子どもの皮膚や身体によくない」という認識が化粧への抵抗感に影響を与えていることがわかった。

Ⅲ. 研究 2: 幼児の化粧に関する保育者の認識

1. 目的

幼稚園、保育所等に勤務する保育者を対象に、幼児期の子どもの化粧に対する認識、自分が担当した子どもが化粧をした経験を明らかにする。

表 6. 子どもの化粧の頻度（1 か月に 1 回以上化粧をしているか）

による化粧に対する抵抗感 $n=139$ （小学生以下の女兒がいる家庭のみ）

	M	SD	
1 か月に 1 回以上	2.50	0.85	$F(2, 123) = 12.21^{**}$ 1 か月に 1 回未満 > 1 か月に 1 回以上 化粧経験なし > 1 か月に 1 回以上
1 か月に 1 回未満	3.82	0.95	
化粧経験なし	4.11	0.69	

$^{**} p < 0.01$

表 7. 幼児が化粧することに関する保育者の認識

$N=228$

	<i>M</i>	<i>SD</i>
化粧をして幼稚園や保育所に行ってはいけない	4.74	0.82
子どもは化粧をしなくてもかわいいので化粧をする必要はない	4.64	0.78
特別な日（発表会や七五三など）に化粧するのは問題ない	4.57	0.65
化粧品は子どもの皮膚や身体によくない	4.23	0.81
子どもの身体に安全な化粧品ならば子どもに使わせてもよい	2.74	1.10
化粧をすることによって子どもが自信を持つことができる ならば化粧をしてもよい	2.49	1.10
子どもが喜ぶならば化粧をしてもよい	2.48	1.02
化粧後に丁寧に落としてあげれば子どもに化粧することに 問題はない	2.22	1.04

表 8. 幼児が化粧することに関する認識と抵抗感の関係（重回帰分析の結果）

	β
化粧品は子どもの皮膚や身体によくない	.470 **
子どもが喜ぶならば化粧をしてもよい	-.145 *
特別な日（発表会や七五三など）に化粧するのは問題ない	-.60
化粧をして幼稚園や保育園に行ってはいけない	-.035
子どもは化粧をしなくてもかわいいので化粧をする必要はない	.147 *
子どもの身体に安全な化粧品ならば子どもに使わせてもよい	-.172 *
化粧後に丁寧に落としてあげれば子どもに化粧することに問題はない	-.095
化粧をすることによって子どもが自信を持つことができるならば化粧を してもよい	.117
R^2	0.44 **

$^{**} : p < 0.01$, $^{*} : p < 0.05$

2. 方法

（1）調査対象者

埼玉県、茨城県、沖縄県で開催された保育者を対象とした研修会（それぞれの県で 1 か所

ずつ）に参加した女性保育者 550 名を調査対象とし、378 名から回答を得た（回収率 69%）。そのうち、回答に不備のあるものを除き、357 名の回答を分析対象とした。

(2) 調査手続き

任意による無記名自記式質問紙調査を行った。調査時期は、2016 年 1 月～3 月であった。

(3) 倫理的配慮

筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 1026）。

3. 結果

(1) 調査対象者の属性

調査対象者の属性を表 9 に示した。年齢は 20 代が最も多かった。また、所属は保育所（私立、公立）が多かった。子どもがいる人は 36% のみであった。

(2) 担当した子どもの化粧経験

これまでに担当したクラスの子どもの化粧をして登園した経験の有無を尋ねたところ、「化粧をしてきた子どもがいる」と答えた人は 13%（48 名）であった。化粧をしてきた子ども（担当した子どもの中で化粧をしてきた子どもが複数いた場合には、最も化粧をする頻度が高い子ども）がどれぐらいの頻度で化粧をしてきたのかを尋ねたところ（表 10）、「頻繁に化粧をしてきた」と答えた人はわずかであり、数回程度にとどまっていた。化粧の内容を尋ねたところ（表 11）、口紅（色付きリップを含む）が最も多かった。

子どもがどのような時に化粧をしてきたのかを尋ねたところ（表 12）、半数は「特に理由はわからない」と答えたが、「発表会などの園の行事の日」「子どもが自分用の化粧道具を買ってもらった後」の回答があった。

(3) 幼児が化粧することに関する保育者の認識

幼児期の子どもが化粧をすることについて、どの程度、抵抗があるかについて、「非常に抵抗がある」から「全く抵抗がない」までの 5 段階のリッカート尺度で尋ねた。保育者の年代（20 代、30 代、40 代、50 代、60 代以上）によって抵抗感に違いが見られるかどうかについて、分散分析を用いて確認したところ（表 13）、有意な差が認められた。残差分析をした

結果、40 代以上の保育者は、20 代の保育者と比べて抵抗感が有意に強いこと、50 代以上の保育者は 30 代以上の保育者よりも抵抗感が有

表 9. 調査対象者

N=357

年齢	20 代	44%（158 名）
	30 代	20%（71 名）
	40 代	14%（49 名）
	50 代	19%（66 名）
	60 代以上	2%（9 名）
	無回答	1%（4 名）
所属	公立幼稚園	9%（31 名）
	公立保育所	18%（64 名）
	公立こども園	3%（10 名）
	私立幼稚園	14%（52 名）
	私立保育所	39%（140 名）
	私立こども園	10%（36 名）
	無回答	7%（24 名）
保育歴	12.12（±11.39）	
子どもの有無	子どもあり	36%（129 名）
	（女兒あり）	23%（93 名）
	子どもなし	62%（222 名）
	無回答	2%（6 名）

表 10. 担当した子どもの化粧の頻度（選択式）

n=48（化粧をして登園した子どもの担当者）

頻繁に化粧をしてきた	6%（3 名）
時々化粧をしてきた	32%（15 名）
1、2 回だけ化粧をしてきた	52%（25 名）
その他	4%（2 名）
無回答	6%（3 名）

表 11. 担当した子どもの化粧の内容（選択式）

n=48（化粧をして登園した子どもの担当者）

口紅（色付きリップを含む）	81%（39 名）
チーク	29%（14 名）
アイシャドー	15%（7 名）
その他	23%（11 名）

（複数回答）

意に強いことを確認した。年齢が高い保育者ほど、化粧をする子どもを見る経験が蓄積されたことから、抵抗感が強く表れたと考えられる。

化粧に関する意見について、どの程度賛成をするかを「非常に賛成する」から「非常に反対する」までの 5 段階のリッカート尺度で尋ね

た（表 14）。その結果、「子どもは化粧をしなくてもかわいいので化粧をする必要はない」「化粧品は子どもの皮膚や身体によくない」という認識が強く、「化粧をすることによって子どもが自信を持つことができるならば化粧をしてもよい」「化粧後に丁寧に落としてあげ

表 12. 担当した子どもはどのような時に化粧をしたか（選択式）

$n=48$ （化粧をして登園した子どもの担当者）

発表会などの園の行事の日	23%（11 名）
子どもが自分用の化粧道具を買ってもらった後	19%（9 名）
子どもが家族と外出をした翌日	13%（6 名）
特に理由はわからない	50%（24 名）
その他	13%（6 名）

（複数回答）

表 13. 保育者の年齢の違いによる化粧に対する抵抗感

$N=357$

	M	SD	F 値
20 代	3.74	0.94	$F(4, 333) = 15.12^{**}$ 40 代 = 50 代 = 60 代以上 > 20 代 50 代 = 60 代以上 > 30 代
30 代	3.88	0.93	
40 代	4.32	0.89	
50 代	4.63	0.73	
60 代以上	4.88	0.35	

** $p < 0.01$

表 14. 幼児が化粧することに関する保育者の認識

$N=357$

	<i>M</i>	<i>SD</i>
子どもは化粧をしなくてもかわいいので化粧をする必要はない	4.74	0.62
化粧をして幼稚園や保育所に来てはいけない	4.39	1.06
化粧品は子どもの皮膚や身体によくない	4.39	0.84
特別な日（発表会や七五三など）に化粧をするのは問題ない	4.15	0.94
子どもの身体に安全な化粧品ならば子どもに使わせてもよい	2.47	1.14
子どもが喜ぶならば化粧をしてもよい	2.32	1.12
化粧をすることによって子どもが自信を持つことができるならば化粧をしてもよい	2.23	1.06
化粧後に丁寧に落としてあげれば子どもに化粧をするに問題はない	2.09	1.02

れば子どもに化粧をすることに問題はない」という意見には賛同しない傾向がみられた。

幼児が化粧することへの抵抗感には、保育者のどのような認識が影響しているのかを明らかにしたいと考え、幼児が化粧をすることへの抵抗感を目的変数とし、表 14 に示した 8 項目の認識を説明変数として、重回帰分析（強制投入法）を行った（表 15）。その結果、母親と同様、「化粧品は子どもの皮膚や身体によくない」という認識が化粧への抵抗感に影響を与えていることがわかった。逆に、「子どもが喜ぶならば化粧をしてもよい」と考えることは、抵抗感を弱めることに影響していることを確認した。

IV. 総括

本研究の結果より、大半の子どもは、発表会や七五三などの特別な行事に限って化粧しており、日常の遊びの中で化粧をしているケースは少数であることが確認できた。このことは、保護者も保育者も「化粧品は子どもの皮膚や身体によくない」と考え、幼児が化粧をすることに否定的であったことが大いに関係している

と思われる。つまり、子どもが雑誌や玩具から影響を受けて化粧に憧れを抱いても、多くの家庭では、大人が日常に取り入れることを制止しているのであろう。

子どもがおしゃれに関心を持つことを否定してはいけない。しかし、雑誌や玩具でキッズコスメの流行を作り、年齢が早い時期から子どもが化粧をすることを容認する文化を作るとは望ましいことではない。幼児期の子どもは母親や保育者のまねをしたがり、化粧やファッションなどを大人と同じようにやることで、大人の仲間入りをしたという感覚を抱く。しかし、子どもは、化粧をすることで皮膚や身体に悪影響が生じるとは考えない。大人と同じようにできるのであれば、当然ながらやりたいと考えてしまう。子どもが喜ぶからと言って、雑誌や玩具でキッズコスメ商品を開発し、進めていくことに警鐘を鳴らしていく必要があると考える。

今後は、幼児期の化粧を容認している保護者がどのような認識で子どもに化粧をさせているのか、保護者自身が化粧にどのような思いや背景があるのかを明らかにしたい。

表 15. 幼児が化粧することに関する認識と抵抗感の関係（重回帰分析の結果）

	B
化粧品は子どもの皮膚や身体によくない	0.35**
子どもが喜ぶならば化粧をしてもよい	-0.24**
特別な日（発表会や七五三など）に化粧をするのは問題ない	-0.01
化粧をして幼稚園や保育園に来てはいけない	0.15**
子どもは化粧をしなくてもかわいいので化粧をする必要はない	0.01
子どもの身体に安全な化粧品ならば子どもに使わせてもよい	-0.12*
化粧後に丁寧に落としてあげれば子どもに化粧をすることに問題はない	-0.14*
化粧をすることによって子どもが自信を持つことができるならば化粧をしてもよい	0.01
R ²	0.46**

** : $p < 0.01$, * : $p < 0.05$

文献

石田かおり (2006) 児童・生徒の化粧実態とその問題点ー化粧教育提案のための実態分析ー, 駒沢女子大学研究紀要, 13, 27-41.

岡村理栄子 (2013) おしゃれによる皮膚トラブル, 調剤と情報, 19 (7), 896-902.

岡村理栄子 (2016) おしゃれ障害ー子どものうちに知っておきたい!, 少年写真新聞社.

岡村理栄子 (2017) 子どものおしゃれと安全 (第2回) メイクーアイメイクを中心にー, チャイルドヘルス, 20 (10), 778-781.

高坂康雅 (2017) 女子青年における用紙に対する劣等感への化粧効果の認識に関する発達心理学的研究, コスメトロジー研究報告, 25, 138-151.

徳田克己・水野智美 (2018) 幼児雑誌の中に見られるキッズコスメ, 日本保育学会第71回大会発表論文集, 印刷中.

付記

本研究は平成27年度公益財団法人コスメトロジー研究振興財団の助成を受けて行った。

Parents' and Nursery Teachers' Awareness about Children's Makeup

The purpose of this research is to clarify the awareness of parents who have a toddler and nursery teachers who work for a kindergarten and daycare center about the fact that toddlers put makeup on in recent years.

We conducted a questionnaire survey to parents who have a toddler and nursery teachers. Based on the research subjecting parents, 85% of the toddlers had the experience of putting on makeup. Among those, 10% of them put on makeup more than once a month.

Based on the research subjecting nursery teachers, and there were few teachers who were in charge of the children who often wore makeup. In most cases, it was only a few times.

Both parents and nursery teachers feel reluctant that children put makeup on and the idea that it is not good for their skin and body was influencing the feeling of reluctance.